

人権コラム1月号

丙午の年初めに

北川 知子 (大阪教育大学)

2026年は丙午。60年に一回巡ってくる年です。私は丙午の学年で、何かにつけて「丙午か…」とネタにされ、人数が少ないから競争していない⇨ガッツがない、頭が悪いと言われたものでした（よくよく考えれば大学入試には浪人生もいるし、18歳人口に合わせて就職求人は減らされたので、競争しなくてよかったのは高校入試まで？ これも偏見ですね…）。

もう今の若い人は知らない・気にしないのだろうと思っていたのですが、「丙午を避けて妊活」という話題を取り上げた新聞記事がありました。「60年前は出生激減…2026年「令和のひのえうま」はどうか？」読売新聞2025年9月16日配信 <https://www.yomiuri.co.jp/otekomachi/20250908-0YT8T50110/>

1966年の丙午の年は、前年比25%減の136万974人で、統計を取り始めた明治以降で最低だったそうです。合計特殊出生率（女性が生涯に産む子どもの数を示すもの）が2を少し上回っていた時代に、1966年だけが1.58に落ち込んだわけです（ちなみに現在の合計特殊出生率は1.15。この1.58という数値を下回り、「1.57ショック」という表現がマスコミをにぎわしたのが1990年）。

もともと丙午の年は火災が多いという俗説があり、それが江戸時代に「八百屋お七」の物語と相まって「丙午の女性は気性が激しく嫁ぎ先に災いをもたらす」という迷信が広がったと言われます。当の私たちは「私たち、そんなに激しいかな？」と笑っていましたが、もう次の丙午が来る頃には、そんな迷信は廃れて「60年前の人たち、ヤバくない？」とバカにされる未来が来るのでは…と予想していたものです。

しかし前掲の新聞記事には、「仏滅や友引を気にする、占いを信じる、そういうのと同じ」「人様が気にする、嫌う年にわざわざ産むことはない」という反応も紹介されており、驚きました。まだ廃れていないのかという驚きと、たとえ迷信でも「人様が気にするなら」、丙午生まれを理由に嫌われる、避けられることが起きる可能性はある、だったらそれを避けるのは当然ではないかと考える人がいることへの驚きです。迷信を理由に人を嫌ったり避けたりする、その考えの方を正してもらわなければ困る、とは考えないのでしょうか…。みなさんはいかがですか？

迷信や俗説を、気にする、気にしないは自由です。でも合理的な根拠のないものを理由に、人を排除することを正当化するような主張は廃れてほしいと切に思います。